パスカルの≪アポロジー≫のプラン復元に関して（Ⅳ）

竹下春日

本稿においてわれわれが論定せんとすることは，パスカルの≪アポロジー≫のプランを構成すべき分類項目名（章名）の復元である。先ずわれわれが心得ておかねばならない事柄は，さし当りわれわれ自身によって推理さるべきタイトルなるものは，パスカルがプランの分類項目名として予定していたものとは必ずしも一致しないであろうということである。例えば或る資料にもとづいて，≪キリスト教の本質≫なるタイトルが推定されたとしても，実際はこれが≪キリスト教の教義≫，≪キリスト教の基礎≫または≪キリスト教の真理≫等でありえたということである。だがこれらのタイトルが言語上異るとしても，その意味内容から言って大差はない（パスカルの立場から観て）。われわれはこの程度形式上の厳密性を欠くとはいえ，プランの復元において，実質上その実態を捉えうることを強調したい。

Ⅰ　タイトルを決定すべき諸資料について

(1)　われわれは前回の拙論に掲げた自然的分類表を資料Aと名附ける。この資料と『第一写本』の分類表とを比較した結果，17項目に汎って両者の一致ないし近似が認められた。こうのち次の二個はなお若干の説明を要する。26° Morale chrétienne＝38善と悪（美徳と悪徳），49義人と悪人，55徳への努力，61キリスト教徒のあるべき姿（Sollen）；18° Fondements de la religion et réponse aux objections＝35キリスト教の土台（根拠・証拠），24不信仰者に対する批判と教導。前回において述べられたごとく，等符号は両分類表の項目名の一致ないし近似を示すものであるが，26°＝38，49，55，61では Classé のタイトル一個に対し自然的分類項目名4個が対応している。これは形式上不合理であるが，項目内容そのものから見るとき，自然的分類の項目名四個を概括した場合には，Classé の該分類項目名（タイトル）に相当しうることを示したも

のである。したがってわれわれは実質上両者を相等と見做したのであり，18°＝35，24についても同様であることは言うまでもない。

(2) 資料Bは La. 14—Br. 560 である[1]。≪アポロジー≫はキリスト教を弁護するものである。したがってその性質上証拠の提出を必要とする。それゆえ「Aの証拠はBである」という形式を採るから，A，Bの両者ないしその一方は内容が重要事項であるかぎり，Non classé のタイトルでありうる可能性がある。ところで La. 14 の最後の部分を引用すると，次のごとくである。≪われわれがぜひとも知らなければならない重要なことは，次の点である。すなわち，われわれは悲惨であり，堕落し，神から離れてはいるが，イエス・キリストによって贖われていること，それについてわれわれは地上にすばらしい証拠を持っているということである。このように，堕落と贖罪との二つの証拠は，宗教に無関心に生きている不信者と，宗教の和解しがたい敵であるユダヤ人とから引き出される。≫[2] この引用文中の叙述は，パスカル自身≪われわれがぜひとも知らなければならない重要なこと≫ tout ce gu'il nous importe de connaître であると述べているから，≪悲惨≫misérables，≪堕落≫corruption，≪贖罪≫ rédemption，≪不信者≫ impies，≪ユダヤ人≫ Juifs 等は，タイトルまたはタイトルの核心を示す語でありうる。

(3) 資料Cは La. 16—Br. 560 bis と La. 43—Br. 562 の二つである——≪……このように，全宇宙は人間に，彼が堕落していることか，または贖われていることかを教え，すべてのものは彼に，彼の偉大か，悲惨かを教える。神の放棄は，異教徒に現われ，神の保護は，ユダヤ人に現われる。≫（La. 16），≪地上には，人間の惨めさか神のあわれみかを示さぬものは何もなく，神なき人間の無力か，神を持つ人間の能力かを示さぬ何もない。≫（La. 43）この二断章のうち，前者の≪全宇宙は人間に……を教え，すべてのものは彼に……を教える≫ tout l'univers apprend à l'homme,……Tout lui apprend……は叙述の内容から言って，普遍的基本的命題を示すものである。したがってこの叙述中に含まれる重要概念はすべて，タイトルとして表現される可能性をもつ——≪彼〔人間〕が堕落していること≫ gu'il est corrompu，≪彼が贖われていること≫gu'il est racheté，≪彼の偉大さ≫ sa grandeur，≪彼の悲惨さ≫sa misère，≪神の放棄≫ abandon de Dieu，≪異教徒≫ pa¨ens，≪神の保護≫ protection de Dieu，≪ユダヤ人≫ Juifs。

La. 43 の≪地上には……を示さぬ何もない……≫ Il n'y a rien sur la terre qui ne montre,……も普遍的内容の叙述であり，したがって次のもろもろの言

葉はタイトルでありうるものと推定される——≪人間の惨めさ≫ misère de l'homme, ≪神のあわれみ≫ miséricorde de Dieu, ≪神なき人間の無力≫ impuissance de l'homme sans Dieu, ≪神を持つ人間の能力≫ puissance de l'homme avec Dieu。

(4) 資料 D は La. 17—Br. 556 である。この断章中重要部分のみを，次に a, b, c に分けて掲げよう。a. ≪事物のあらゆる動向は，この宗教〔キリスト教〕の確立と偉大とをその目的とすべきはずである。人間は，この宗教の教える事柄に合致した観念は，自分のうちに持つべきはずである。結局，この宗教があらゆる事物の向うべき目的となり，中心となり，その原理を知る者は，特殊的には人間の全性質を，一般的には世界の動向を，説明することができなければならない。≫ b. ≪ゆえに，キリスト教は，次の二つの真理を同時に人間に教える。一人の神が存在し，人間はその神を知ることができる。また人間の本性には腐敗があり，それが人間に神を知らせないようにしている。これらの点を二つとも知ることは，人間にとって等しく重要である。≫ c. ≪これらの点から世界の秩序を検討し，あらゆる事物がこの宗教の二つの要点を確立する方向へ向かっているかどうかを調べてみるがよい。すべて迷うものは，これらの二つのうち一方を見ないために迷うのである。つまり，人は自分の悲惨を知ることもできる。だが，神と自分の惨めさとを同時に知ることなしに，イエス・キリストを知ることはできない。イエス・キリストはすべてのものの目的であり，すべてのものが向かっている中心である。彼を知るものは，あらゆる事物の理由を知るのである。≫

さてこれらの引用文中 a. は≪この宗教≫ la religion すなわちキリスト教が，≪あらゆる事物の向うべき目的となり，中心と≫ l'objet et le centre où toutes choses tendent……なることを強調している。したがって≪キリスト教≫を意味内容の中核とする名称が，タイトルとなりうる可能性を持つ。すなわち，≪キリスト教の確立と偉大≫ l'établissement et la grandeur de la religion, ≪キリスト教の教える事柄≫ ce gu'elle〔la religion〕nous enseigne, ≪キリスト教の原理≫ les principes が，これである。b. では，キリスト教の≪二つの真理≫ denx vérités が重要視され，≪これらの点を二つとも知ることは，人間にとって等しく重要である。≫ Il importe également aux hommes de connaître l'un et l'autre de ces points. と述べられている。≪これらの点を二つとも……≫とは，先出の≪二つの真理≫を指すものであり，したがってわれわれは，≪キリスト教の真理≫または≪キリスト教の二つの真理≫がタイトル

たりうる資格をもつと推定しうるのである。c．の引用文においては，最後の部分でイエス・キリストの重要性が極めて強調されている。それゆえ≪イエス・キリスト≫ Jésus-Christ ないしこれを核心として含む名称は，タイトル候補として十分である。これはまたキリスト教の常識から言っても，当然であると言えよう。

(5) 資料Eは La. 38—Br. 290 である——≪宗教の証拠 (Preuves de la religion)。道徳 (Morale)。教理 (Doctrine)。奇跡 (Miracles)。予言 (Prophéties)，表徴 (Figures)。≫この断章には，パスカルの分類意識が明瞭に覗われる。したがって，各語がタイトルでありうる可能性は極めて強い。

(6) 資料 F は La. 40—Br. 74 である。この断章には≪人間的学問と哲学との愚かさについての手紙。≫という見出しが附いており，この後にすぐ≪この手紙を「気ばらし」の前に。≫と書かれている。したがって≪人間的学問と哲学との愚かさ≫ folie de la science humaine et de la philosophie はタイトルになりうるし，≪気ばらし≫ divertissement はその文意から推して，完全に≪章≫ chapitre の名前と考えてよい。

(7) 資料 G は La. 42—Br. 449 である。≪秩序。堕落の章の後に言う……≫における≪堕落≫ corruption は，文意から推して確実に章名（タイトル）である。

(8) 資料 H は La. 47—Br. 61 である。この断章の初めの部分は，次のようである——≪順序。私はこの論述を次のような順序で始めることも，あるいはできたであろう。すなわち，あらゆる境遇のむなしさを示すために，普通の生活のむなしさ，ついで懐疑論およびストア派の哲学的生活のむなしさを示すのである。しかし，この順序は守られないであろう。……≫この叙述は≪むなしさ≫ vanité を述べる順序にかんするものであるが，論述の順序の如何にかかわらず，≪むなしさ≫がテーマであることに変りはない。したがって≪むなしさ≫は，タイトルたりうると考えて差支えあるまい。

(9) 資料 I は La. 49—Br. 242 である。この断章は，≪第二部序言≫ Préface de la seconde partie なる見出しを有している。したがってこれは，≪アポロジー≫の≪第二部≫の内容の，少くともその一部を示すものである。それゆえ，この内容の主旨を表示する名称は，≪アポロジー≫を構成する章名（タイトル）の資格を，十分持つものである。われわれは次に，稍か長いこの断章の一部を引用しよう——≪第二部序言。この問題を論じた人たちについて話すこと。これらの人たちが，神についていかに大胆に語ろうとするかに私は感心する。不

信者に議論を向けながら，彼らの第一章は，自然界の被造物によって神を証明しようとするのである。もしも彼らの議論を信者に向けるのであったら，私は彼らの企てに驚かないであろう。なぜなら，心のうちに生きた信仰を持つ人たちは，存在するものは，すべて彼らのあがめる神の御業にほかならないということを，ただちに見てとるのは確かだからである。だが，心のなかでそのような光が消えてしまったので，それを再びともしてやろうとわれわれがもくろんでいる人たち，すなわち，信仰と恩恵とを失い，自然のなかに見えるあらゆるもののあいだに，この知識へと自分らを導いてくれるものがないかと，自分自身の光のすべてを用いてさがし求めたにもかかわらず，闇と暗黒しか見いだせない人たち，そういう人たちに向かって，彼らを取り巻くもののなかで最も小さなものを見るだけでも，神があらわに見えるだろうと言ったり，この重大な問題の証拠のすべてとして，月や遊星の運行を与えたり，こんな議論でその証明を完了したと自認するのは，われわれの宗教の証拠が実に薄弱であると思わせる根拠を与えることになるのである。彼らに軽蔑の心を起こさせるのに，これ以上適したものはないことを，私は理性と経験とによって知っている。神に関することがらをもっとよく知っている聖書は，このようには語っていない。その反対に，聖書は，神は隠れた神であり，そして自然性の腐敗以来，神は人間の盲目のうちに放置し，人間がそこから脱出できるのは，イエス・キリストによってのみであり，この人をほかにしては，神とのすべての交わりは取り去られていると述べている。＜父を知るものは，子と，子があらわそうとして選んだものとのほかにない＞……≫

この断章の主旨が，≪神を証明する≫ prouver la Divinité ことにかんする≪議論≫ discours であることは，一読して明らかである。パスカルが批判の対象としているのは，例えば≪この重大な問題の証拠のすべてとして，月や遊星の運行を与えたり≫することである。何故ならこうした証明方法は，不信仰者に≪われわれの宗教の証拠が実に薄弱であると思わせる根拠を与えることになる≫からである。これに対してパスカル自身は，La. 11 で≪宗教の証拠≫を提示する旨を記している。そうしてこの彼の示す証拠が，≪完全な誠実さと，真理に出会いたいとの真の欲求とをもってこの本に接する人たち≫ の ≪満足を得≫ることを期待している。したがって，彼自身の提供する証拠が，彼によって批判された証拠より勝っていることは，言うまでもあるまい（パスカル自身から見て）。

扨てこの断章は前述のごとく，≪第二部序言≫という見出しを持つものであ

り，したがって≪アポロジー≫の第二部全体に関係する重要な叙述である。しかもパスカル自身，この断章中で≪この重大な問題の証拠≫ preuve de ce grand et important sujet と述べて，問題の重要性を指摘している。それゆえこの断章の主旨を示す言葉は，当然タイトルたりうると推定しなければならない。われわれはかような語を，≪神の証明にかんする議論≫と規定して大過あるまい。ところでわれわれは，これに対応するタイトルを，『第一写本』の分類項目（Classé）中に見出す——14°≪この神の証明法がすぐれていることについて≫Excellence de cette manière de prouver Dieu。この Classé 中のタイトルとわれわれが推定したタイトル候補名とは，名称の上で大きな相違があるが，意味内容の上から言って大差あるものではない。なぜなら≪神の存在にかんする議論≫は，その資料となる La. 49 には上述のごとく他の証明法に対する批判が見られる以上，当然パスカル自身の提出する証拠の優越性が前提されているし（直前のパラグラフ参照），また Classé の≪この神の証明法がすぐれていることについて≫は，この名称自身他との比較，他の証明法に対する批判を含んでいる。したがって，両者は内容的には大略等しいことになる。

(10) 資料 J は La. 459—Br. 289 である。≪証拠。(Preuves) 一。かくも自然に反するのに，自力でかくも強固に，静かに確立したキリスト教の成立によって。(1° la religion chrétienne, par son établissement, par elle-même établie si fortement, si doucement, étant si contraire à la nature.) 二。キリスト者の魂の聖潔，高尚，謙虚。(2° La sainteté, la hauteur et l'humiilté d'une âme chrétienne.) 三。聖書の不思議。(3° Les merveilles de l' Ecriture sainte) 四。特にイエス・キリスト。(4° Jésus-Christ en particulier.) 五。特に使徒たち。(5° Les âpotres en particulier.) 六。特にモーセと予言者たち。(6° Mo¨se et les prophètes en particulier.) 七。ユダヤ民族。(7° Le peuple juif.) 八。もろもろの予言。(8° Les prophéties.) 九。永続性。他のどの宗教にも永遠性がない。(9° La perpétuité : nulle religion n'a la perpétuité.) 十。すべてのことを説明する教義。(10° La doctrine, gui rend raison de tout.) 十一。この律法の聖きこと。(11° La sainteté de cette loi.) 十二。世界の動きによって。(12° Par la conduite du monde.)……≫この断章の小見出しである≪証拠≫とは，勿論宗教（キリスト教）の証拠のことであり，したがって列挙された各項目は≪アポロジー≫の章名または章名の根拠となりうるものである。

(11) 資料 K は Non classé 中に見出される小見出しつきの諸断章である。かかる断章は Non classé 中に少くとも78個あり[3]，これらのうちに Non classé

のタイトルが含まれていることは，確実であると言ってよい。なぜなら既にClassé において，同様の事態が見られるからである。Classé の場合，小見出しつきおよびタイトル附きの断章は全部で約140個あり，このうちタイトル（章名）と一致するものは77個[4]に達する。それゆえ，Non classé の小見出し中タイトルと一致するものが存することは，確かであり，皆無であるとは想像し難い。

(12) 資料Lは『第一写本』の分類項目名，すなわち Classé の titres である。この分類表が資料たりうる理由は，Lafuma が Classé および Non classé の各≪序文≫ Préface を比較して行った証明の正当性にある。すでに拙論（第二回）において紹介したごとく，Lafuma は La. 29 と La. 48～49 との内容の一致を指摘し，これによってパスカルが1659年以前において決定したプランを彼の死の直前まで変更しなかったものと，結論しているのである[5]。したがって Classé のタイトルは同時に Non classé のタイトルでありうるわけである。ところで Classé の諸タイトルは，次の通りである——1° Ordre ; 2° Vanité ; 3° Misère ; 4° Ennui ; 5° Raison des effets ; 6° Grandeur ; 7° Contrariétés ; 8° Divertissement ; 9° Philosophes ; 10° Le souverain Bien ; 11° A.P.R. ; 12° Commencement ; 13° Soumission et usage de la raison ; 14° Excellence de cette manière de prouver Dieu ; 15° bis La nature est corrompue ; 16° Fausseté des autres religions ; 17° Religion aimable ; 18° Fondements de la religion et réponse aux objections ; 19° Loi figurative ; 20° Rabbinage ; 21° Perpétuité ; 22° Preuves de Moïse ; 23° Preuves de Jésus-Christ ; 24° Prophéties ; 25° Figures particulières ; 26° Morale chrétienne ; 27° Conclusion.

II　Non classé のタイトル

以上われわれは，12個の資料を掲げたのであるが，最後の資料Lを除いて，残余の資料全部が Non classé から採択されたものであること，また資料 B，C，D，I は1661—1662年代に書かれたものであることを，附言しておき度い（Lafuma による）[6]。扨て諸資料がタイトルたりうるものとして示すものの一致は，別表のごとくである。

III　表の説明と注釈

(一)表左上の C. ; N. C. はそれぞれ Classé ; Non classé の意であり，1°，2°，3°，……は Classé のタイトル番号，A，B，C……は資料番号で，おのおの Classé

のタイトル，Non classé のタイトル候補名を示している。㈡表右上の「一致点数」とは，タイトル（Classé の）と候補名（N.C. の）の一致した回数，すなわち一致した資料の点数を意味し，「タイトル」とは「一致点数」にもとづいて，Non classé のタイトルとして認められるものを指す。タイトルの認定は，一致点数3以上をもって，これを判定した。蓋し一致点数が2の場合は，偶然の一致として見做される可能性が無いわけではないからである。

㈡以下注釈に移る。a——資料Cと16°との一致（グラフを読むように C16° と呼ぶ，以下同様）は，16° Fausseté des autres religions と資料Cの≪神の放棄≫ならびに≪異教徒≫とが一致していることを示している。これは外見上異るように見えるが，後者は，資料Cの引用文——≪神の放棄は，異教徒に現われ……≫に由来するものであって，文意から言って「異教徒の宗教が神によって放棄さるべき虚偽のもの」という意味（パスカルにとって）を持つことは，明らかである。したがってわれわれは，C 16° を認めうるのである。

b——D 17° は≪キリスト教の確立と偉大≫(D)と 17° Religion aimable との一致を示すものである。パスカルの宗教的見地から見て，キリスト教が偉大であって愛すべきものであることは，改めて言うまでもない。思想上両者（Dと17°）の一致を認めうるばかりでなく，感情的な言語表現の上から言っても，≪確立と偉大≫l'établissement et la grandeur は，容易に≪愛すべき≫aimable と結びつきうる。これは，J 17° についても同様である。資料Jでは，パスカルは≪la religion chrétienne≫を≪par elle-même établie si fortement, si doucement, étant si contraire à la nature≫と感動的に呼んでいる。

c——I 14°が一致点数2であるにもかかわらず，タイトルとして認定されたのは，資料Iが既述のごとく重要断章であることにもとづく。Iは1661—1662年代に執筆された断章であり，しかも≪アポロジー≫の≪第二部序言≫なる見出しを持つものである。さらに≪アポロジー≫の本質から言っても，≪神の証明にかんする議論≫(I)は必須のもので，これを欠くことは絶対にできない。以上がI 140° を認定した理由である。

d——J 19° は≪この律法の聖きこと≫と 190° Loi figurative との一致を示している。われわれが両者の一致を認めた理由は，律法の≪聖きこと≫sainteté とは神を正しく象徴する意味で≪象徴的≫figurative であるからである。すなわち，神の聖らかさを律法が象徴しているからして，律法は聖きことでありうるのである。これはパスカルの神学的立場から見て，当然のことである。

e——J 26°は≪キリスト者の魂の聖潔，高尚，謙虚≫と Morale chrétienne

C. \ N.C.	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	一致点数	タイトル
1°	○										○	3	◎
2°	○							○				3	◎
3°	○	○	○								○	5	◎
4°	○										○	3	◎
5°													
6°	○		○								○	4	◎
7°	○		○								○	3	◎
8°	○					○						3	◎
9°	○					○						3	◎
10°	○										○	3	◎
11°													
12°													
13°													
14°									○			2	◎
15°													
15° bis	○	○	○				○				○	6	◎
16°	○		○									3	◎
17°	○			○						○		4	◎
18°	○			○	○					○	○	6	◎
19°	○				○					○	○	5	◎
20°													
21°										○	○	3	◎
22°										○		2	
23°	○			○						○		4	◎
24°	○				○					○	○	5	◎
25°													
26°	○				○					○		4	◎
27°													◎

(26°) との一致にかんするものであるが，前者がキリスト教道徳の理想を示す点で，両者は内容的に大略一致しているものと言って差支えあるまい。

f——K10°は≪Recherche du vrai bien≫ (La. 305) と 10° Le souverain Bien との一致を意味しているが，両者はたんに言語表現の違いにすぎないゆえ，改めて説明するまでもないであろう。

g——最後の 27° がタイトルとして認定される所以は，この断章綴（リヤス）が Conclusion なるタイトルを持つからである。パスカルの≪アポロジー≫が反対論を駁し，自説を証明せんとする論述である以上，≪結論≫を欠くことは到底できない。物理学の論文中で≪Conséquences≫なる小見出しを用いたパスカルの科学者としての性格から言っても，これは明白であると言わねばならない。

以上注釈を施したもの以外はすべて，名辞の一致ないし近似によって，容易にタイトルたることを判定しうるのであるが，要するにわれわれは，叙上の論述を通じて，Non classé のタイトルとして20個を確定しえたのである。

〔注〕

（1） 断章番号はすべて Lafuma の Delmas 版に拠る。

（2） 訳文は『世界の名著24，パスカル』（中央公論社刊）による（以下同様）。

（3） 拙論第二回の補注および第一回を参照のこと。

（4） この数字は Lafuma が＜Avec le titre＞と注している断章数をふくんだものである。かかる断章は69個あり，この外にわれわれのいわゆる「小見出し」つき断章が 8 個存する。

（5） 両≪序文≫の内容的一致ないし近似にかんしては，Lafuma はこれを読者の直観的判断に委せているにすぎない。彼はこれで十分と見ているようであるが，普通一般の読者にとつては，両者の一致は必ずしも明瞭ではない。したがってわれわれは，われわれれ自身の論証によって，彼の証明を補強すべき機会を，漸て持つに到るであろう。なおわれわれは拙論第二回において，Lafuma の主張について，「その実証の単純簡明なるゆえに，云々」と述べたが，これは≪パンセ≫に精通した読者（特にパスカル研究家）を念頭に置いたものであることを，付言しておきたい。

（6） Lafuma, Histoire des Pensées de Pascal, Editions du Luxembourg, Paris, 1954, p. 25 ; Lafuma, Recherches pascaliennes, Editions Delmas, Paris, 1949, p. 65-66 に拠る。（注了）